

症例から学ぶ泌尿器疾患の画像診断

鳴海 善文 編

＜書評者＞ 野々村 祝夫（大阪大学医学部泌尿器科教授）



本書は第1章の総論に続いて、第2章から第11章までは各論として臓器別に記載されていて、さらに第12章から第15章までは「小児・先天異常」、「外傷・後腹膜血腫」、「リンパ節」、「IVR」と、少し切り口を変えた構成になっている点特徴的である。

総論部分では、各画像検査における理論的な特徴を解説することによって、目的とする疾患を描出するためにはどういったことが必要か、なぜこの疾患を見るにはこの画像診断法が適しているのかということが非常にわかりやすく書かれている。第2章以降の各論では本書のタイトルにあるように、症例ベースでの解説となっているので、その症例における画像所見の特徴や注意点がわかりやすく解説されている。「画像所見のポイント」というところでは、放射線

診断の先生にお聞きしたい事項を整理して記載されていて有り難い。また、所々に出てくる「Note」というコーナーは重要なポイントをわかりやすく解説しているので、読者にとって非常に有用である。各提示症例には、「問題」まで用意されていて、理解度のセルフチェックにも使える。

さらに、悪性疾患の項では取扱い規約や診療ガイドラインを意識して書かれているため、日常診療においても直ぐに役立つように構成されているのが特徴ともいえる。例えば、良性腎疾患の項には「BCG関連の肉芽腫」や「IgG4関連腎臓病」が症例として提示されているが、これらは泌尿器科にとっても稀な疾患ではあるが、その鑑別は重要である。前立腺癌の診断において、次第に浸透してきたPI-RADSについて記載されて

いるのはこれまでの同様の書籍との違いではないだろうか。加えて、膀胱癌の項で、最近話題になっているVI-RADSについて「Note」に取り上げている点には、本書の編集者である鳴海善文氏の思いが込められていると感じる。

泌尿器科医出身である鳴海善文氏の編集であるからこそ、泌尿器科医にとって知りたい画像情報の読み方を、また放射線診断医にとっては泌尿器疾患の臨床的特徴をわかりやすく解説することで、双方ともに役立つ書籍となっていると感じる。

● B5 頁488 2019年4月
定価：本体7,800円＋税
[ISBN978-4-8157-0156-7]
MEDSi